

本院小児歯科患者の歯ブラシの把持法と口腔衛生状態の関係性について

○菅 北斗、稲田絵美、北上真由美\*、佐藤秀夫、橋口真紀子、村上大輔、合田義仁、山崎要一  
鹿大・院医歯・小児歯、\*鹿大・医歯・病院

**【目的】** 一般的に歯面の刷掃時に推奨される歯ブラシの把持法には、ペングリップとパームグリップがある。ペングリップは余計な力がかからないためブラシ圧がコントロールしやすく、また、小回りが利くため小刻みな運動に適している。しかし、把持が難しく技術的要素が要求されるため、運動機能の未熟な低年齢児には、把持の容易なパームグリップが適しているといわれている。そこで、今回我々は、歯ブラシの把持法の実情について把握するべく、歯ブラシの把持法とプラークの付着状況の関係性について調査を行った。

**【対象と方法】** 当科に通院している患児のうち、毎日仕上げ磨きを実施されていない4歳から15歳の74名を対象に歯ブラシの把持法に関するアンケートを行った。また、患児の口腔内を12ブロックに分け、歯ブラシの把持法の違いによるプラークの付着状況に関する年代別傾向について統計的に検討した。

**【結果】** 歯ブラシをペングリップで把持している患児の割合は、増齢とともに増加し、ほとんどのブロックでプラークの付着は減少する傾向を示した。しかし、パームグリップを用いている患児では、プラークの付着状況は全年齢を通して同じ傾向を維持していた。つまり増齢によるプラークの減少を認めなかった。また、10歳未満の児童ではペングリップよりもパームグリップを用いたほうが有意にプラークの付着を減少させることが明らかになった。

**【考察】** 本調査結果から、運動機能が未熟な10歳未満の児童には、把持しやすいパームグリップが適していることが明確となった。また、上肢運動の安定性や協調性が上達する10歳以降の児童には、ペングリップを推奨したほうが口腔衛生状態を良好に保てること示唆された。

本院小児歯科患者の保護者を対象とした歯ブラシと仕上げ磨きに関する調査

○窪田直子、稲田絵美、北上真由美\*、武元嘉彦、森園 健、岩崎智憲、山崎要一  
鹿大・院医歯・小児歯、\*鹿大・医歯・病院

**【目的】** 低年齢児は上肢運動の安定性や協調性が低いいため、スムーズな歯磨き動作を営むことが困難である。さらに、歯の交換期には各歯の状況が常に変化するため、より歯磨きは困難になる。そのため、保護者による仕上げ磨きは非常に重要である。今回我々は、仕上げ磨きに関する保護者の意識と実情について把握すべく、仕上げ磨きに関する調査を行った。

**【対象と方法】** 当科に通院している1歳から12歳の患児160名の保護者を対象に、歯ブラシと仕上げ磨きに関するアンケートを行った。また、毎日仕上げ磨きをされている患児の口腔内を12ブロックに分け、各ブロックのプラークの付着状況に関する部位別の傾向と経年的変化について統計的に検討した。

**【結果】** 仕上げ磨きの頻度について、1、2歳は全員が毎日の仕上げ磨きを実施していたが、3歳以降は増齢的に仕上げ磨きが減少していた。歯ブラシの選択理由は、「子ども用と書いていた」が最も多く、次いで「ヘッドの大きさ」、「歯科医院で売っていた」、「値段が安かった」が多かった。実際に患児が使用している歯ブラシのヘッドの大きさとブラシの硬さについて、歯科衛生士が評価したところ、ヘッドの大きさは23%、ブラシの硬さは7%の保護者が適切に選択できていなかった。各ブロックのプラークは、上顎前歯部唇側、上顎左右臼歯部頬側、下顎左右臼歯部舌側に多く付着しており、プラークの付着状況は全年齢を通して同じ傾向を維持していた。

**【考察】** 本調査結果から、外来で仕上げ磨きの指導をする際に、全年齢を通して特に指導を強化すべき部位が明確になった。また、歯ブラシは適切な形態を選択できていなければその効果を発揮することができないにも関わらず、保護者が歯ブラシを購入する際には、形態を重視していないことが明確になった。よって、歯ブラシの選択方法も指導項目であることを歯科医療従事者が自覚し、口腔衛生指導の一環として実施する必要がある。